

詩篇119篇49～56節

- 49 どうか、あなたのしもべへの**みことば**を思い出してください。あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。
- 50 これこそ悩みのときの私の**慰め**。まことに、**みことば**は私を生かします。
- 51 高ぶる者どもは、ひどく私をあざけりました。しかし私は、**あなたのみおしえ**からそれませんでした。
- 52 主よ。私は、あなたのとこしえからの**定め**を思い出し、**慰め**を得ました。
- 53 **あなたのみおしえ**を捨てる悪者どものために、激しい怒りが私を捕らえます。
- 54 **あなたのおきて**は、私の旅の家では、私の歌となりました。
- 55 主よ。私は、夜には、あなたの御名を思い出し、また、**あなたのみおしえ**を守っています。
- 56 これこそ、私のものです。私が**あなたの戒め**を守っているからです。

זָכַרְתִּי דְבָרְךָ לְעַבְדְּךָ עַל אֲשֶׁר יִחַלְתָּנִי:
 זֹאת נִחְמָתִי בְּעַנְיִי כִּי אָמַרְתָּה תִּיָּתְנִי:
 יָדִים הִלִּיצְנִי עַד־מָאֵד מִתּוֹרָתֶךָ לֹא נִטִּיתִי:
 זָכַרְתִּי מִשְׁפָּטֶיךָ מֵעוֹלָם יְהוָה וְאֶת־נַחֲמֶם:
 וּלְעַפְּהָ אֶחְזַתְנִי מִרְשָׁעִים לְזָבִי תוֹרָתֶךָ:
 זְמֵרוֹת הָיוּ־לִי חֻקֶּיךָ בְּבַיִת מְגוּרֵי:
 זָכַרְתִּי בְּלִילָה שִׁמְךָ יְהוָה וְאֶשְׁמְרָה תוֹרָתֶךָ:
 זֹאת הִיְתָה־לִּי כִּי כִּלְוִיָּה נִצַּרְתִּי:

第七字「ザイン」。この箇所では、詩人が「高ぶる者ども」の「あざけり」（51 節）によって、深い「悩み」（50 節）の中にあつたことが分かります。彼は、自分に関することならまだしも、主の御名が貶められることに「激しい怒り」（53 節）を覚えていました。その敵対者は、詩人が大切にしている「みことば」を蔑み、それに従って生きようとしている姿を卑しめました。人は自分が信じることをわら嘸われるとき、侵犯してはならない心の一線を踏み越えられた感覚を覚えるでしょう。他人の信仰を誹謗中傷する人は、本質的に「信教の自由」を否定しているのです。

とはいえ、福音の内容は誰にでも理解できるものではないということも忘れてはなりません。へりくだった心で聖書を開かなければ、そこに書かれている「神のことば」は決して理解できるものとはならないのです。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることができないのは、神の知恵によるのです。

(I コリント 1:21)

各文頭に出てくる「ザイン」で始まる語を調べてみましょう。

「זָכַר／ザーカル」(49, 52, 55) ……思い出す

「זֹאת／ゾース」(50, 56) ……これ

「גָּדוֹל／ゼード」(51) ……傲慢な人

「זֶלַעְפָּה／ザルアファー」(53) ……恐怖

「זָמַר／ゼミール」(54) ……歌、詩

詩人は、自分の信仰が否定される苛立ちに震えましたが、それでも尚、主の御言葉に立ち続けました。誰が何と言おうと、聖書は彼を「慰め」(50, 52)、「生かす」(50節) ものだったのです。これは、御言葉を糧とする人にしか味わうことのできない人生の宝、何者にも介入できない神と自分との関係であります。

人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。(申命 8:3)

詩人は「旅の家」(54) に宿泊していたのでしょうか。不慣れな土地で不安を抱きながら、「夜」(55) 静まって瞑想していたのかもしれませんが。そのとき、「あなたのおきて」が「私の歌」となったのです。御言葉を口ずさんでいるうちに旋律になっていったのでしょうか。旧約の詩篇歌は確かにそのようにして生まれたと言われます。

私たちも、自分の歌となるほどに御言葉を暗誦し口ずさむような日々を送りたいものです。教会で歌ってきた讚美歌や聖歌がふと口に登ってくることもあるでしょう。様々な状況に応じて、蓄えられた聖書のストーリーが適合されてくるとき、御言葉はまさしく私たちの人生に受肉しているのです。そのとき、あらゆる問題の解決を主とともにできるようになっていきます。信仰をもって聖書を開き、主の答えと導きを求めて祈り、まだ見ぬ解決を信じて歩み始めることができる。それが、御言葉と共に生きる幸いな人生であります。